様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年５月２３日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３７３０８２５

研究課題名（和文）「文法的な書き誤りにこだわらずに書く」ことの作文指導における意義に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the significance in the writing of guidance noting the clerical error

研究代表者
森田　真吾（MORITA　SHINGO）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３６１４０３

研究成果の概要（和文）：本研究は、学習者によって書かれる文章の中に見られる「文法的な書き誤り」に注目し、それを否定的に扱うのではなく積極的に指導の中に位置づけることの意義について論じた。作文指導書や文法教科書における「書き誤り」の位置づけの検討を行い、実際に小・中学生に書いてもらった文章を分析した結果、「書き誤り」を許容することは作文指導における発想支援などに活かすことができるのではないかという点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the availability of guidance for writing with a " clerical error " that can be seen in the text of the learner. After conducting a study of place in grammar textbooks and writing tutorial of "clerical error ", and analyzed the text the learner actually wrote, I made it clear that allowing the " clerical error " is useful, for example, creativity support in writing guidance

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	１，６００，０００	４８０，０００	２，０８０，０００

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：各教科の教育・作文指導

１．研究開始当初の背景

我が国の国語教育のおける「文法」は、明治５年の「学制」公布以来、常に学校教育の中で教えられるべき指導内容として位置づけられようとしていた。そこでは様々な指導目標・指導内容が提示されてきた。明治 30 年以降、国語意識の涵養といった問題とも結びつきが強まり、文法指導の中で示される明示的・体系的な知識にはある種の規範性も付与されるに至った。それは、今日の「知識偏重・暗記重視」の文法指導の根本原因になっている。

そのような状況を打開するためにはどうすべきかについて論じることが、戦後期における文法指導研究の一貫したテーマとなっているように思われる。文法的な知識をただ「与える」のではなく、学習者の文章表現や文章理解に「役立てる」ための文法指導とはどうあるべきかが模索されてきたといっても過言ではない。たとえば、昭和 20 年代におけるいわゆる「機能文法」に関する議論や児言研・教科研におけるあらたな指導内容の模索などがそれに相当するであろう。

こうした戦後文法教育において大事にされようとしてきた「『与える』から『役立てる』へ」という理念を引き継ぎつつ、自身も「学校文法」観を転換させることの重要性を指摘し、学習者の言語活動に寄り添った文法

指導にすべきであるといった提言を行ってきた。

しかし、なかなか状況は変化しない。文法指導は依然として「知識偏重・暗記重視」で行われている。文法に関する知識を含んだ「国語の特質に関する事項（言語事項）」は、学習指導要領においては「話すこと聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」の活動を通して指導されるものとされているが、どのような指導を行うことがそれを実現することにつながるのかという点については今後さらなる追究が求められなければならない。

そうした問題意識に基づき、本研究で注目するのが、学習者が書く文章の中に存在する「文法的な書き誤り」である。

たとえば、作文指導の中で文法的な知識を活かすための手だてとして「推敲活動」における添削を取り上げることができる。学習者の文章表現の中にあらわれた「文法的な書き誤り」（主語・述語の呼応関係の乱れなど）を、指導者が訂正するという指導はきわめて一般的に行われているように思われる。そこにおいては、総じて「文法的な書き誤り」が学習者の文章表現に存在してはならないものとして、否定的に扱われている。

しかし、そもそも学習者は自分自身の表現が誤っているとは思っていないためにそのような文を書いてしまうのである。誤っていることを指摘し正しい用法を提示することが、指導の手だてとして必ずしも有効であるとは言えない。かえって学習者の文章表現意欲を萎縮させてしまう結果をも生じさせかねないこともなる。主述のねじれ・論理的な不整合といった「文法上の書き誤り」は、適切な文章表現を獲得する際の過渡期に生じるものといった形で捉え直していく必要がある。そのように捉え直すことによって、たとえ不完全であったとしても、「文法的な書き誤り」を含んだ文章を書くという行為を、学習者の文章表現能力向上のために、作文指導の中に積極的に（肯定的に）位置づけることが可能となる。

２．研究の目的

本研究においては、まずは学習者の文章表現における「文法的な書き誤り」に対する認識をあらためるために、これまでの作文指導・文法指導の中で、学習者の文章中に見られる「文法的な書き誤り」がどのように位置づけられてきたのか、その歴史的な経緯に対して検討を行う。特に、それらがなぜ「誤り」とされるにいたったのかという点に対して考察を加え、その妥当性について論じることとする。そして、「誤り」として指導過程から捨象するのではなく、そうした「書き誤り」を含んだ文章を書くことの積極的な意義について論じるために、学習者の文章中に表れた書き誤りの分析を行うこととする。

３．研究の方法

（１）まず、これまでの文法指導・作文指導において「文法的な書き誤り」であるとされてきた文章上の特徴に再検討を加えることを中心課題とする。そのような文章上の特徴にはどのようなものがあるのかを洗い出し、そうした誤りがどうして生じてしまうのかといった点について、先行論に学びつつ自身の立場を確かなものにしていく。そして、これまでの文法指導・作文指導の中で「文法的な書き誤り」とされてきた学習者の文章表現上の特徴を、文章表現能力を獲得する過渡期に生じる必然的なものと位置づけることを目指す。

（２）（１）の成果をふまえ、実際の小学生ならびに中学生に「文法的な書き誤り」にこだわらずに自由に文章を書いてもらい、その内容を分析することによって、そうした文章を書く行為の有する作文指導における有効性を明らかにすることを目的とする。

なお、その際「文法的な書き誤り」にこだわらずに学習者に文章を書いてもらうための手立てとして、「プライベート・ライティング」に注目する。

プライベート・ライティングとは、「ピーター・エルボーとパット・ベラノフという才気溢れる二人のライティング教師によって作り出された言葉で、自分のためだけにすばやく思考を紙上に書き出す方法」（マーク・リービー著，・森重優美訳『書きながら考えるとうまくいく　プライベート・ライティングの奇跡』ＰＨＰ出版，2004，p.18）である。

これまでの作文指導において、学習者が書

くことを要求されてきた文章は、基本的には以下の要件が求められてきた。

・一貫したテーマ
・論理的整合性
・誤字・脱字、文のねじれなどのない叙述

それに対して、プライベート・ライティングは以下の理念に基づいて行われることで、その常識を悉く覆すものとして注目される。

〇冴えない考え、下手な書きぶりを許容
〇できるだけ速く
〇限られた時間で
〇考える言葉で
〇思考に導かれるままに

これまで「文法的な書き誤り」であるとされていた文章上の特徴などを、学習者の文章表現行為のなかで許容しつつ、プライベート・ライティングを行ってもらった場合、そこには学習者が本来有する構文操作能力が顕示され、学習者が「本当に書きたい」と思っている内容がそこに含まれることが推察される。

４．研究成果

学習者の文章表現の中に見られる「文法的な書き誤り」研究の再検討を行うために、これまでの作文指導・文法指導の中で、学習者の文章中に見られる「文法的な書き誤り」がどのように位置づけられてきたのか、資料収集を行い、その歴史的な経緯に対して考察を加え、その妥当性について論じた。収集した資料は次の通りである。

① 教科書関係資料…明治～昭和戦前期における国定教科書・国定読本など、「正しい文体」を学習者の目に触れるレベルで具体的に提示したものとして、これらの資料を位置づけ、その内実を明らかにするための検討を行った。
② 文法指導関係資料…明治～昭和戦前期に刊行されていた文法の教科書を中心に資料収集を行った。いわゆる「文語文」を書くことが指導目標として認められていた当時において、文法レベルでどのように「書き誤り」を規定しようとしていたのか検討を行った。
③ 日本語誤用分析関係資料…日本語学の分野で「誤用」がどのように分析されているかを確認するために資料収集を行った。これらにおいては、主に非母語話者の誤用が分析の対象となっており、母語話者の誤用を考える手がかりを得ることができた。

これらの資料を用いて分析を行った結果、これまでの作文指導において認められようとしてきた「書き誤り」は、それぞれの時期に於ける文体状況における「規範」の推移にしたがって揺れが見られることが確認され、それに連動することによって文法指導における指導内容も規範性を獲得するに至ったのではないかという点を指摘した。

以上をふまえ、実際の小学生ならびに中学生に「文法的な書き誤り」にこだわらずに文章を書いてもらうための方法を措定し、実際に書いてもらった文章を分析することによって、「文法的な書き誤り」にこだわらずに文章を書く行為の作文指導における可能性について論じた。

書いてもらうための方法については、大学生に対する予備調査を行い、「プライベート・ライティング」の手法をベースにしつつ、先行研究・先行実践のなかで採られている方法を参考にして、以下の点に留意しつつ学習者に文章を書いてもらうことにした。

・ 心に思い浮かんだことを思い浮かんだままに書き出す。
・ できるだけ速く、限られた時間の中で書く。
・ 考える言葉で、できるだけ長い文章を書く。
・ 漢字の誤りや文のねじれ・展開の飛躍などを気にしないようにして書く。

以上に基づき、千葉市内の中学校・小学校の子どもたちに対して調査を行い、書かれた文章内容の分析を行った結果、以下の点が明らかになった。

① 「『思ったことを書きなさい』という教師による指示（言葉かけ）だけでは書けない」とよく言われているが、そこで書くべき内容について限定をかけずに何を書いても許容しようとする場を設定していけば、何かしら書けるものを子どもたち一人一人は持っている。

② 子どもたちによって書かれた文章の中の「文法的な書き誤り」には、論の飛躍・文末表現の不十分な記述などが多く見られる。

③ 文章内容については、自分のしたいことやほしいものなどが中心となっている。

検討の余地は残されているが、本研究における調査から、「文法的な書き誤り」にこだわらずに書くことは、書くことの指導における発想支援あるいは構想（下書き）指導への援用可能性を見いだすことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

(1) 森田真吾、「ことばの力」は誰のためのものか？、実践国語研究、査読無、2013、pp.12-13

(2) 森田真吾、学力調査問題に対する学習者の「つまずき」をこれからの指導に活かすために、指導と評価、査読無、vol.58、2012、pp.40-43

〔学会発表〕（計１件）

① 森田真吾、文法教育/教育の近代―学校文法成立前史（ワークショップ 文法教育の近現代）、日本語学会高知大会、2011，10.22、高知大学

〔図書〕（計２件）

(1) 全国大学国語教育学会編、学芸図書、国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ、2013（近刊）、分担執筆（森田真吾「文法論・文章論・談話論の学習指導に関する研究の成果と展望」）

(2) 森田真吾、千葉大学国語教育第三研究室（私家版）、「文法的な書き誤りにこだわらずに書く」ことの作文指導における意義に関する調査報告書、2013、50

６．研究組織

(1)研究代表者

森田　真吾（MORITA　SHINGO）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３６１４０３